

---

## 研究ノート

---

# ニュッサのグレゴリオスの 『雅歌注解』における *ἐπέκτασις*

手塚 奈々子

### 序

本研究は、ニュッサのグレゴリオスにみられる人間の現存在把握がキリスト教的人間理解にいかなる新しい地平を開くか論じてみようという趣旨である。そこで神と魂の合一の問題が中心テーマとなっている『雅歌注解』を中心とし、彼の特徴である *ἐπέκτασις* 理論から導き出される人間像を浮き彫りにしようと思う。この『雅歌注解』は、雅歌 1:1 から 6:9 までオリゲネスの伝統に由来する聖書のアレゴリー解釈、靈的解釈に基づき、キリストを中心としてそこへとすべて関連づけて解釈されている。そしてそこでは浄められてゆく魂のキリストとの靈的合一のプロセスが描かれ、魂の更なる極みへの靈的上昇が説かれているが、これは *ἐπέκτασις* によって可能にされているのである。このことは特に魂の神の暗闇の突破体験によく表れている。そこで当箇所についてⅠでテキストを具体的に考察し、そこからⅡでそのテオリアの観点で *ἐπέκτασις* の構造とその意味を論じ、Ⅲでその *ἐπέκτασις* による人間論は神の像の復元に至っていることに言及したい。

### I

靈的上昇についてグレゴリオスは、魂における神体験として光、雲、暗闇の契機を挙げている。「神現は、偉大なモーセに光によって始まった。これらのことの後で神は、モーセに雲を通して語る。それからモーセは、より高くより完全に今や成り、彼は暗闇の中で神を見る。このことによって我々が学ぶものは、次のようなことである。神に関する偽りの感わされた諸観念から離れてまず退くことは、闇から光への移

行である。次に隠されているものをより直接に理解することは、現れているものを通して魂を目に見えない本性へと導く、いわば雲のようなものが生起し、それは一方で現れているすべてのものに影を投げかけ、他方隠れているものを見ることへと魂を導き、慣らすのである。これらのことを通って上なるものへと旅する魂は、人間の本性によって到達できる限りのものを後ろに残し、神の知識の至聖所の内側で魂は神の暗闇 *ὁ θεῖος γνόφος* によってあらゆる側から切り取られるようになり、そこで現れているもの把握されるすべてのものが外に捨てられ、魂の観想にとっては、ただ目に見えないもの、把握されないもののみが残されている。ここに神がいる」<sup>1)</sup>。この光、雲、暗闇の契機は、以下の意味を持つ。光の状態は、この世的なもの、質料的なものからの浄め、神からの照らしの段階である。雲の段階は、シンボル、アナログアによって被造物から創造者を逆推論していく段階から、見ないで信じる段階へと移ることである。そして暗闇の段階にあっては、神が人間本性によって到達できるもの (*αἰσθησις* と *διάνοια* による把握を示す) を無限に越えていることを教えられる。

さてそれではこのように超越する神はいかなる仕方であらうか。その鍵は次の言葉にある。「見られないものが夜にどうやって現れるのであろうか？彼は魂にある現存の感覚 *αἰσθησίς τῆς παρουσίας* を与えるが、彼は本性の不見性によって隠され、明らかな理解を逃れている」<sup>2)</sup>。すなわち、神と魂とのかかわりは、神が現存するという、その感覚が神から与えられるという形で生起している。暗闇において、人間の本性によっては神への到達は不可能であるとされているがゆえに、この現存の感覚は神からのものである。すなわち、この神の「現存」は神からの魂への働きかけを示している。この「現存」をめぐる、例えば教理論争においては以下のごとく論じられている。

4世紀の教理論争、特に三位一体論争で主張されているのは神が被造物からは超越した存在であることである。グレゴリオスの論敵エウノミオスは、神は人間精神に知られ得るとする合理神学を説いた。それに対してグレゴリオスは神の本性は知られざるものとして反駁している。神の本性は知られないが、エネルゲイアは知られ得る、与り得るとして、カパドキアの教父達はテオロギアとオイコノミアとを区別している。この本性の神学、テオロギア内で論じられるのが神の本性における三位一体論で、神と歴史との関わりで論じられるオイコノミアにおける三位一体論とは区別されている。このオイコノミアにおいて神の外的顕現であるエネルゲイアが知られ得るとされるが、

それは受肉において殊に明らかである。オイコノミアの目的は、墮落した人間本性の「神の像」の復元である。この「神の像」の復元のプロセスはキリストによって始められた。キリストの受肉によって神のエネルゲイアは知らされているが、神の本性は知られないものとしてとどまり、神の超越性は保持されている。

だから、上で「現存」と言われているものは、グレゴリオスによれば、神のエネルゲイアである。エネルゲイアは捕らえられ得るとされている。「神の本性は決して把握されず、類推されることもなく、ただそのエネルゲイアによってのみ知られ得る」<sup>3)</sup>。

一方、神の暗闇は神の本性の捕らえがたさ、神認識の超絶性を示している。神の暗闇のシンボルによって表されているものは、神の本性の超越性、無限性であると同時に、もう一方で人間の有限性、神を把握できない人間の限界を示しているものである。神を知ることは恩寵によってのみ神の現存の感覚を与えられて生起するのである。神の暗闇の秘密は、神はエネルゲイアとして魂に恩寵として与えられるが、それにもかかわらず本性は知られずに秘義としてとどまることを意味している。神の存在が魂に生起する。エネルゲイアとして魂に与えられることは魂の神への参与を生じさせる。にもかかわらず、本性が超越していることは神の無限性につながり、従って人間の参与の無限性を引き起こす。この神と人間の関わりは神が人間を創造してゆくプロセスであり、*ἐπέκτασις* と呼ばれるものである。これは、雅歌 5:6 について、魂の神の暗闇体験の突破の契機に良く表されている。「さて彼女が、モーセに従って、憧れている者の顔が自分に知られ現れるように希望した時、その時探し求められている者は彼女の把握を逃げ去った。彼女は、私の愛する者は立ち去っていたと言う、彼は自分に従って来る魂を捨て去るのではなく、自分の方へと引きよせているのだ。彼女は言う、私の魂は彼の言葉で外へ出た。御言葉について行く魂が出立つところのあの出立に幸いあれ！……我々が現にいるところのものから離れ出る出立は、超越する善への入り口になる」<sup>4)</sup>。「このことによって御言葉は次のことを教えていると私は思う、すなわち、神を見ようと欲求する人は常に神に従うことにおいて憧れる者を見る (*ὁ ἰδεῖν τὸν θεὸν ἐπιθυμῶν ἐν τῷ ἀεὶ αὐτῷ ἀκολουθεῖν ὁρᾷ τὸν ποθοῦμενον*)、だから神の顔の観想 *θεωρία* は、神に向かったの決して終わることのない旅であり、御言葉に後から従うことによって達成されるのである」<sup>5)</sup>。「探求において常に前進することと上への道の前進を決して止めないことが憧れる者の真の享受 *ἀπόλαυσις* であり、常

に満たされる欲求 *ἐπιθυμία* が超越する者への新たな欲求を生むのである」<sup>6)</sup>。

## II

さてこの神の暗闇の突破は従来のテオーリア概念の突破を意味している。グレゴリオスにとって、神のテオーリアは魂の神に「従って行く」歩みの中で語られている。テオーリアは「見る」「知る」ことの中にはなく、「欲求する」ことの中に置かれている。このテオーリアは最終的な神把握ではなく、常に従って行く動的なテオーリアである。魂の神への憧れの中で神を見ることがテオーリアとされ、これは従来のヌースによるテオーリア概念を突破している。従って問題となってくるのは人間の前進ということ、すなわちグレゴリオスにおいてはテオーリアを欲求の内に置くことによって人間が生成それ自体の内に捕らえられてくる。「完成を前進の内に見る」のである。特に『完成について』では「真に完成それ自体とは、より善いものへ向かって成長することを決してやめないことであり、いかなる限界によっても完成を定めないのである」<sup>7)</sup>とされている。従って魂の前進それ自体に完成を見るということは、人間の成立をダイナミックなものとして捕らえており、常にこれは存在における自己完結的な世界を打ち破って行くものである。この可能性を打ち開くのは人間の意志のみである。そこで人間の浄められた欲求、エロースが神と結び付くことのできる、すなわち無限に成長することのできる、開かれたものへの成長を可能にする唯一のダイナミズムとして言われてくるのである。「エロースは高められ強められたアガペーと呼ばれる」<sup>8)</sup>とある。このダイナミズムは神のアガペーである。アガペーにより、神の本性は流れ出るエネルゲイアとして現前し、魂の内に内在するようになる。これが神の現存の意味である。*ἐπέκτασις* はこの神の内在に参与し、同時に常に超越し続ける神に向かって参与していくことであるが、ここで生成と存在の一致の逆説が生起している。被造物の特徴は生成である。被造物は神の存在に与ることによってのみ、存在することができると言える。そこで生成それ自体が存在に成るといふ逆説が起こっているのである。

グレゴリオスは4世紀のニカイア派教父と同様に、創造者と被造物の断絶を根本に置き、人間の本性に2つの区別を立てている。「我々の中には2重の本性がある。一方は薄く英知的で軽いものであり、他方は厚く質料的で重いものである。……この両者の間に我々の自由の能力、選択 *προαίρεσις* がある」<sup>9)</sup>。グレゴリオスによれば、人

間の道行きはこの2分された本性により2通りである。一方は神に参与してゆく道、神の無限性に参与することにより、人間は成長において無限である。もう一方は神から離れて質料の領域の内に生成してゆく道である。質料的生に向かって行く魂は、質料に呪縛され循環の牢獄の中に監禁されてしまう。神に向かうか、悪に向かうかは人間の自由選択意志によって決定されて行く。神は本性無限である。人間は無限なる神に向かう限りにおいて成長が無限となり、有限な人間が無限性を獲得できる唯一の道である。「あらゆる精神 νοῦς を越えている至福な永遠の本性は、それ自らの内に全存在を含み、どんな限定によっても規定されない。……神の本性について思考されるあらゆる善は無無限な限界のないものの中へと進行する。……一方で魂は超越するものへの参与 μετουσία によって、常に自己より偉大なものになり、成長するのを止めることはない、他方参与される善は同じものにとどまる、同様に更なるものへの参与によって等しく善は常に凌駕していることで見出だされる」<sup>10)</sup>。そして、人間存在の被造性ということにより運命づけられている可変性を神に向かって積極的に利用することが求められている。「御言葉は本性に従って変化されることを免れない存在者である我々に、その可変性 τροπή によって、悪へと落ちることではなく、常により善いものへと成ってゆく成長を通じて可変性をより高い上への道行きに向かって共働するものとして所持することを望んでいる」<sup>11)</sup>。この成長のプロセスが ἐπέκτασις と呼ばれる。ἐπέκτασις とはこの神の無限性に基づく人間の無限前進に対して、J. Daniélou がグレゴリオスの『雅歌注解』から取った、ピリピ 3:13 に基づく言葉である<sup>12)</sup>。「たとえ全く偉大で完全であるように見えるとしても、上にあるもの、より偉大なものの始まりなのである。このように以上のことにおいて使徒の言葉が実証されている、前にあるものへ向かって身を伸ばすこと ἐπέκτασις を通して以前達成されたものを忘れることに至る<sup>13)</sup>」。この人間存在を動的なダイナミックな生成概念の内に求める地平は、従来のギリシャ思考に見られる自己同一把握を本性の内に求めるスタティックな人間把握を打ち破りそれに挑戦するものである。今までの歩みを相対化して行くことの内に魂には常に新しい地平が開けて来る。この ἐπέκτασις は、人間の存在を完結した自己同一性の内に求めることとは異なり、生成することそれ自体に人間の現存在を求めている。

ところでグレゴリオスは神の暗闇の否定神学によって人間の認識能力を否定したのではない。人間の被造物でありながら自己完結しようとするその閉鎖性を、すなわち

人間の認識が中心となることを否定しているのである。そこで捕らえようとするエロースに基づく求心的な自己中心の認識を根本とする生の歩みが否定され、「現存の感覚」という恩寵に基づく信仰による遠心的な神中心の生の歩みが説かれる。従ってグレゴリオスの語る欲求、エロースはプラトンのそれとは性格を異にしている。また、ギリシヤ的思考にとって完全性を打ち消す否定的なものとしていた変化を、グレゴリオスは積極的に意義づけている。上述したごとく、選択という自由意志による行為の背後に存在論的分析がなされている。すなわち選択による生成は人間の可変性に基づかれる。グレゴリオスにおいては、この可変性に自由の能力が根拠づけられる。可変性が *ἐπέκτασις* を可能にするのである。そして、プラトン、アリストテレス哲学にとっては否定的なものとしてきた無限なもの *ἄπειρον* が神とされ、この神の無限が魂の無限の生成を引き起こすのである。

### Ⅲ

Ⅱで述べられたテオリアの問題は、グレゴリオスにおいては、プラクシスの問題を連続的に引き込み重なり合っている。「テオリアは、もし行為が伴わないならば、それ自体によっては魂を完成させない」<sup>14)</sup>。このプラクシスはキリストをまねぶことによって達成される。グレゴリオスによれば、キリスト教とは「神的本性のミメシスである」<sup>15)</sup> と『キリスト者の宣言について』で定義されている。また、『完成について』ではキリストの名に因んで30以上の諸徳があげられ、キリスト者であると名づけることはこのキリストの徳をまねぶことにおいてであるとされるが、「我々に余地のあるものを我々はまねび、本性がまねぶ余地のないものを我々は畏敬し、礼拝する」<sup>16)</sup> とある。『雅歌注解』では魂の霊的上昇の内に果たされて行くミメシスが、原型を映す鏡のメタファーとして言われる。「原型はまねびの中に明白に見られる、同様に彼女は私は我が愛する者のもの、我が愛する者は私のものと言っている。彼女は言う、キリストによって同じ形に成ったことは自分自身の美を受け取ったことだ。それは我々の本性の原初の至福であり、原初の唯一の真理である美の像と似像に従って飾られたことだ。すなわち鏡の中に生じることのように」<sup>17)</sup>。更に、『モーセの生涯』ではキリストは「全きアレテーたるキリスト」<sup>18)</sup> と言われる。アレテーたるキリストのまねびの内に前進することが、グレゴリオスにとって人間の完成であり、神の像の復元となる。

『雅歌注解』でキリストが魂に誕生すると言われている。「イエスは我々の中に子供として生まれ、御自分を受け取る人々の中で様々に、知恵と年齢と恩寵において前進するのだが、すべての人において同じ方ではない」<sup>19)</sup>。魂の成長は内在するキリストの成長である。この *ἐπέκτασις* のプロセスの内に神はエネルゲイアとして魂に内在するが、にもかかわらず神の本性が知られざるままにとどまるということにより、人間と神の合一は、本性による *unio mystica* にはならず、*communio mystica* として生起する。神と魂の本性的合一ではないことにより、それは神意識と共に私という自己意識がなくなならないままで人格と人格のコイノーアとして成立する。これこそグレゴリオスの言う神の像の復元である。すなわち、『雅歌注解』の結末にも、「神がすべてにおいてすべてと成りますように、我々の主イエス・キリストにおける善のコイノーアの内に互いに一つに結び合わせられますように」<sup>20)</sup>と述べられている。「神の像」として造られた人間本性の墮落を贖ったのがキリストの受肉であり、創造者一被造者の断絶の深淵に橋を架けたのもキリストの受肉である。人間はキリストの人性と共に神のエネルゲイアに与り絶え間なく駆け上って行くのである。「肉において現れた神は……彼と永遠の合一に向かって婚約させられた花嫁から愛する者の名で呼ばれる」<sup>21)</sup>。*ἐπέκτασις* はキリストの受肉に基づく人間の神化の道行きである。自由意志による人間のこのエネルゲイアへの参与は魂に神の無限性により、無限な成長を引き起こす。*ἐπέκτασις* に見られる神の超越と内在はこのキリストの神性と人性の受肉の神秘に魂が参与していることを表している。

## 結

グレゴリオスにとって人間は、神のエネルゲイアに生かされ、そのエネルゲイアへの前進の内に人間の成立が求められるが、無限に聖化するこのエネルゲイアはプロティノスの *ἐπιστροφή* とは逆の働きをなすアガペーによる。本性に人間の自己同一を見るギリシャ的な人間把握、特にプロティノスでは、人間の完成を人間の本性の神との融合の内に（その原動力はエロースである）求められていた。神との合一はまた、キリスト教の伝統の内でも完成、究極のテオーリアを最終的な彼岸での神を見ることに置かれていた。しかしグレゴリオスの開いた人間像は神の超越と内在に参与して行く人間のダイナミックな生成の内に人間の現存在把握が求められているので、「完成が前進の内にある」のである。完成は最終的な彼岸にあるのではなく、今ここに現存

する神の内在に参与することにおいて同時に超越する神の無限性に与ることとなり、これは「永遠の今」の実現である。ἐπέκτασις に描かれるこの自己同一性を打ち破る人間の自己完結しない在り方、神に参与し前進するという絶えず静と動との緊張関係の中で存在論的に脱自して行く在り方は、本性とエネルゲイアという静と動を持つ受肉する神の在り方の写しであり、すなわち人間はこの神の像 εἰκῶν と似像 ὁμοίωσις なのである。

### 註

使用した原典は、The Jaeger Edition; *Gregorii Nysseni Opera* (Leiden, E. J. Brill) の内、VI. Langerbeck, H. (ed.); *In Canticum Canticorum Commentarius* (1960).

他に、VII, I. Musurillo, H. (ed.); *De Vita Moysis* (1964). VIII, I. Jaeger, W., Cavernos, J. P. and Callahan, V. W. (ed.); *Opera Ascetica* (1963).

- 1) 『雅歌注解』 *Opera* VI, p. 322-323.
- 2) *Ibid.*, p. 324.
- 3) *Ibid.*, p. 339.
- 4) *Ibid.*, p. 353-354.
- 5) *Ibid.*, p. 356.
- 6) *Ibid.*, p. 369-370.
- 7) 『完成について』 *Opera* VIII, I, p. 214.
- 8) 『雅歌注解』 *Opera* VI, p. 383.
- 9) *Ibid.*, p. 345.
- 10) *Ibid.*, p. 157-158.
- 11) *Ibid.*, p. 252.
- 12) Daniélou, J.; *Grégoire de Nysse, la Vie de Moïse* (Sources Chrésiennes I) troisième édition (Paris, Edition du Cerf, 1968). p. 26 参照.
- 13) 『雅歌注解』 *Opera* VI, p. 174.
- 14) *Ibid.*, p. 394.
- 15) 『キリスト者の宣言について』 *Opera* VIII, I, p. 136.
- 16) 『完成について』 *Opera* VIII, I, p. 178.
- 17) 『雅歌注解』 *Opera* VI, p. 439-440.
- 18) 『モーセの生涯』 *Opera* VII, I, p. 118.
- 19) 『雅歌注解』 *Opera* VI, p. 96.
- 20) *Ibid.*, p. 469.



21) *Ibid.*, p. 436.